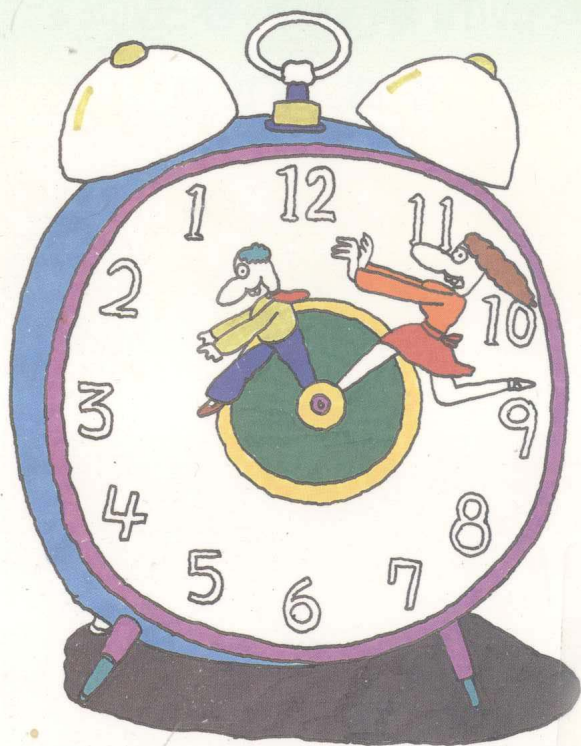


時計の巻左

高田刀阿



新潮文庫

ひだり ま と けい
左巻きの時計

新潮文庫

あ - 7 - 7



昭和六十一年五月二十五日 発行
昭和六十三年四月十五日 刷行

著 者 阿 刀 田 高
あ とう たかし

発 行 者 佐 藤 亮 一
さとう りょういち

発 行 所 株式 会社 新 潮 社
しんしやう

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六一五一
編集部(〇三)二六六一五四〇
振替 東京 四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦 製本・加藤製本株式会社

© Takashi Atôda 1983 Printed in Japan

ISBN4-10-125507-5 C0195

新 潮 文 庫

左 卷 きの 時 計

阿 刀 田 高 著



新 潮 社 版

3622

はじめに

この本は、昭和五十八年の一月から四月まで『夕刊フジ』に連載したエッセイを、単行本としてまとめ、それを文庫本としたものである。

『夕刊フジ』は会社帰りのサラリーマンが電車で揺られながら読む新聞。そう断言してもあながちまちがいではあるまい。そしてその七、八割は男性の読者だろう。

堅い話は、満員電車の苦しさを考えれば、あまり適当ではない。軽く、やわらかくをモットーとして書いたが、今、あらためて校正をまとめて読んでみると、かなりやわらかい。筆者の性向がおのずと滲み出^{にじ}てしまったらしい。少々反省している。

エッセイである以上、どうしても自分の身辺の話が中心になってしまう。徒然草^{つれづれさま}のかた作者の脳味噌が思い浮かべる『よしなしごと』が主な内容になる。だが、私としては、私自身の話でありながら、同時にサラリーマン諸氏が職場で、あるいは酒場で、ちよつと会話の材料にできるようなものであることを心がけた。けっして私だけの話にならないよう努めたつもりである。百篇あまりのトピックスに特徴があるとすれば、そのへんではあるまいか、と考えている。

四カ月のあいだ、毎日一つずつトピックスを提供するのは、なかなか厄介な仕事であった。

今でもその苦勞の記憶が頭のどこかに残っているのだが、現実には、執筆のときから数えて、すでに三年以上の歲月が流れている。ページのあちこちに、古い話や、古い事例がないでもない。だが、あえて筆を加えず、原則として執筆のときの内容のままで出版した。部分的な修正は思いのほかむづかしいし、ときには不可能に近い。お許しいただきたい。

著 者

昭和六十一年春

目

次

はじめに……………	三
書き初め……………	三
キスとセックスの間……………	一五
日本語事情……………	一八
男のピストル……………	二二
隣は何をする人ぞ……………	二四
パチンコ必勝法……………	二七
歌の文句……………	三〇
キスあらかると……………	三三
推理小説と棒高跳び……………	三六
寒さ暑さ……………	三九

ベター・ハーフ……………	四三
泣き売……………	四四
四股名……………	四六
「やらせろ」の美学……………	五一
隣室の声……………	五四
透明人間になる法……………	五七
キャスター体験……………	六〇
スキヤンダルをあばく……………	六三
電話番号……………	六六
書評のあと……………	六九
桃源の匂い……………	七二
風邪引きの自己弁護……………	七五

S子の麻雀……………	六
黄色いシュプレヒコール……………	八
役満貫……………	四
男の嘘・女の嘘……………	七
寅さんの言語学……………	〇
貸金苦……………	三
鎮痛剤……………	六
無料の楽しみ……………	九
人を見る眼……………	三
ラスト・サービス……………	五
簡易雄弁術……………	八
岡濡らし……………	二

名前の記憶……………	二四
女性のためのアルコール作法……………	二七
靴……………	三〇
パフン調……………	三三
声の功罪……………	三六
赤ニシン……………	三九
小説の挿し絵……………	三三
小春日和とコロンプス……………	三五
スマートに行こう……………	三八
死んでください……………	四一
ベッド考……………	四四
二元論……………	四七

頭髮の不自由な人……………	一五〇
美人について……………	一五三
五パーセントの科学……………	一五五
タレーランの名言……………	一五九
女の切り札……………	一六三
脳味噌の笑い……………	一六五
化学調味料……………	一六六
軍艦巻き……………	一七一
案内状……………	一七四
キス泥棒……………	一七七
自由業……………	一八〇
限界効用……………	一八三

こたつ慕情……………	一八六
アイが一番……………	一八九
握手と乾盃と祝砲と……………	一九三
消火器……………	一九五
トイレット考……………	一九八
ア・ラ・パパ……………	二〇一
原因と結果……………	二〇四
火事と腰巻き……………	二〇七
抱擁の文化論……………	二一〇
小林一茶の研究……………	二一三
心とお金の交差点……………	二一六
首が落ちた話……………	二一九

下衆のあと知恵……………	三三
呪い殺し……………	三五
簡易文献検索法……………	三八
千人信心……………	三一
カメラのない旅……………	三四
一から百まで……………	三七
プレッシャー……………	四〇
ガール・フレンド物語……………	四三
タバコのための屁理屈……………	四六
バストの周辺……………	四九
国会図書館と野手選択……………	五三
新人賞について……………	五五

酒で身上は潰れるか……………	五八
人間最期の言葉……………	六一
RとLから……………	六四
奇景あり……………	六七
背広と和服……………	七〇
ウナギとヒルの教訓……………	七三
オストラキスモス……………	七六
柳の下での泥鰌……………	七九
香水作法……………	八二
あなたの会社はどうですか……………	八五
ヨサホイ節考……………	八八
ヒモの適性検査……………	九一

錢湯を捜した話	二九四
名文句の効用	二九七
あうんの呼吸	三〇〇
テストスの言語学	三〇三
美しい季節	三〇六

愛情死	三〇九
女の台詞	三二三
O嬢の物語	三二五
美女の条件	三二八
自分の名前	三三一

解説 中村桂子
カット 久里洋二

左巻きの時計

書き初め

書き初め。正月二日の行事である。平安時代に始まり、寺子屋の普及とともに広まった。明治時代にはいったん衰えたが、初等教育の教課に取り入れられて一層広まり、盛んになったものらしい。

歳時記を読むと、若水で墨をすり、菅公の画像を掛け、恵方えほうに向かってめでたい詩句をえらんで書いた。十五日の左義長さぎちやうの火でそれを焼いて、火が高く上れば手があがるといって喜ぶと記してある。

若水は新年に初めて汲む水。さらに正式に言えば、新年に宮中で天皇へ奉った水のことである。菅公は名筆として名高い菅原道真公のこと。東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るなのおじさん。古来学問の神様として名高い。恵方はその年の歳神のや



つて来る方角。今年はどちらの方向からお見えになるのだろうか。左義長は小正月の火祭で、正月の飾り物などを「どんど、どんど」の掛け声で焼いた。この火に当たると、好運に恵まれるとか、若返るとか、言い伝えがあった。歳時記の文章も、今では注釈を加えないとわかりにくい。

以上が正式な手続きなのだろうが、今どきこんな念入りの書き初めをする人はいない。子どもを相手に父親が炬燵こたつからはい出して来て、

「よし、お父さんが書いてやる」

「いいよ、紙がないから」

「その新聞紙を寄せ」

などと言って、昔取った杵きねづか、酔った手で「春の山里」と書いたりする。

小学生の頃は「せっかく楽しいお正月なのに、くそおもしろくない宿題だな」と、あまり印象のよろしいしろものではなかったが、今、子どもたちが書いているのを眺めていると、さほどわるいものじゃない。まずなによりも精神の鍛練になる。一字一字、筆をおろす前に気を落ちつけて「さて、この字はどう書こうか、この棒はどのあたりまで持つて行き、どこらあたりで曲げようか。どこを注意して書けばいいか」と、ビジョンを頭の中に描かなければいけない。子どもというのは、あまりものを考えずにいきなり行動を起こす癖があるから、そういう態度に反省をうながす意味でも書き初めは役に立つだろう。

いったん筆をおろしたら、一気呵成に書かなければいけない。途中で戸惑ったりしたら、ろくなことがない。多少「失敗したかな」と思っても、けつしてたじろがず、そのまま勢いよく最後まで持つて行けば結構恰好がつく。

このあたりの気分が、なにかに似ているなと思案したら、ようやく思い出した。そう、そう、これは女性の手を握るときによく似ている。公園のベンチで唇を盗むときにもよく似ている。

あれもまたいったん行動を起こしたら最後までスムーズに、けつしてたじろがずに進まなくてはいけない。途中でひるんだりすると、まことに無様な結果となる。一気呵成に進めば、相手も合わせてくれる。書き初めはまた気弱な男性のためにも役立つ鍛練かもしれない。よし、今年は「公園の春」とでも書くとしようか。

キスとセックスの間

最近、頭に宿りついて離れない思案が一つある。われとわがための興味ではない。日本女性の意識がどう変りつつあるか、その推移を考える社会的な大問題である。

それは——と気張るほどのこともないのだが、いったい現代の日本女性はキスとセックスとのあいだにどれほどの距離を置いているか、という問題である。平たく言えば、キスを許した男性に、どの程度の可能性で肉体関係を許しているか、というテーマである。

知りあいの女性には、たいてい質問してみた。正直に答えてくれる人もいれば「そんなこと、馬鹿ね」と、軽く笑うだけの人もいる。サンプルの数が少ないので、まだ自信のある結論は得ていない。

欧米人の場合は、この二つのあいだの距離はとても遠い。キスなんてものは文字通り日常

